

## 【社会科】

### ひとり学習の充実からまなざしの共有へ

#### 1 「意味と内容」がひろがる社会の学び

##### ①社会科における意味と内容

社会科では「意味と内容」を“社会事象に対する自分なりの考えを持ち、他とのかかわり合いの中で社会的な見方、考え方を持つこと”

ととらえている。子どもは何かの事象にぶつかったとき、ひとりひとりの物の見方がちがってくる。その物の見方のちがいが一番分かりやすいのが社会科の学習であると考えている。

子どもたちが社会の形成者として成長していくために必要なことは社会科で学習する内容や事柄だけではなく、学校で学習・体験することすべてが何らかの形で役立っていく。社会科で学習する内容は、現在社会の中にあることを取り上げて学習するため、社会科はより具体的に直接的に社会に関わる教科であるといえる。また社会の仕組みは単に知識として獲得するようなものではない。「ひと・もの・こと」の対象と関わらせる中で必然性が生まれ、それを追求していくことで身に付いていくものとする。

##### ②「意味と内容」をひろげる

意味・内容をひろげるとは、子どもたちが対象に対して意味づけしていくことである。子どもたちが対象に向かって追求していくとき、単に学習内容の範囲を広くするというのではなく、自分の追求をより確かなものにするために、自分の力で対象に向かい考えていこうとすることである。私たち教師の側から引っ張っていくのではなく、子どもに添って考えていくことが大事である。例えば「クラスのこどもたちは今どんなことに興味を持ち、何を見つめているのか」とか「この子はこの問題をどうとらえどのように向き合うだろうか」というように、今、自分の目の前にいる子どもたちの生活の向こう側に潜んでいる社会的な問題を見つけることのできる教師でありたいと思っている。

また、単に覚えただけの知識と、必然性を持って追求する中で獲得していった知識とでは、同じ事柄でも、子ども自らが使えたり使えなかったりという問題が生じてくる。暗記中心の知識は、子どもの中では事柄そのものが単独でしか存在しない。しかし、追求する中で獲得していった知識は、単なる知識そのものではない。その知識を獲得するための筋道や学び方が大切なのである。

#### 2 社会科でめざす子どもの姿

- ・ こだわりを持ち、社会科の学習を進めていける子
- ・ 社会的事象を公正に判断し、未来につなげられる子

子どもが持っている社会事象に対する見方や考え方は様々である。それは、既習内容の理解や生活経験が異なるからである。そこで、新たな社会事象と出会ったときに、友達の考えと自分の考えを比較したり共感したりする場を、私達は全体学習ととらえている。全体学習の中で子どもひとりひとりが友達と関わりながら自分のおもいやこだわりを持ちながら学習することで、それを自分の自信へとつなげていきたい。

また「社会的事象を公正に判断する」とは、社会的事象の表面的な事実を調べることにとどまらず、その意味や人々のおもいまでを多角的、多面的に見つめて考え判断できるようにすることである。社会的事象の多くは、立場を変えて見ると違った見方のできるものである。それを一方的な見方で見ていたのでは、その真実にせまることはできない。そこで子どもひとりひとりが社会的事象を多角的、多面的に見つめることを何よりも大切にできるよう私達は指導していかねばならない。また自分の見方、考え方を表現し友達と比べることにより、独りよがりではない公正なものを見方ができるようにしていきたいと考えている。

「未来につなげられる子」とは、自分が今生活している社会に愛着をもつことであり、それをもとにした自分なりの未来の社会像を描くことである。社会的事象を公正に判断できるようになり、自分にとっての社会的事象の意味を考えることが出来るようになることで、子どもたちは自分と社会的事象との関わりを明確にし、自分なりの社会像を描くことができると思っている。そして“自分にとっては”“自分ならば”と自分と社会とのかかわりを考え未来につなげていく子に育てて欲しいと願っている。

### **3 研究テーマ設定の理由**

私達はこれまでの学習は全体学習を追いすぎていたのではないかと考えている。社会科の学習として値打ちのあるものにするには、全体学習と同じぐらいにひとり学習が大事でないと考えている。全体学習は考えを練りあう場であり、ひとり学習を発展させる場である。全体学習はひとり学習のためにあり、ひとり学習は全体学習のためにあると考えている。そこで社会科の学習を通して、全体学習につながるひとり学習のあり方を研究していきたいと考えた。

#### **☆ひとり学習の充実からまなざしの共有へ**

学習課題を設定するのは子どもたちであるが、まず、ひとり学習を充実させるために、教師がどんな学習対象を選ぶのかということが大事になる。

#### **学習対象の選び方**

まず、私たち教師は、どんな学習対象であれば、子どもたちが、ひとり学習を進めていけるのかを考えなくてはならない。ひとりひとりの子どもが対象とぶつかっても、ひとりで学んでいける対象であるのかどうかを私たちはよく吟味する必要がある。子どもが、多面的にいろいろな角度から疑問を持ち追求できるものが、学習対象としてふさわしいと考える。では、そういう対象と子どもたちを出合わせる時に、どのような出合わせ方をすればよいのかを考えてみたい。

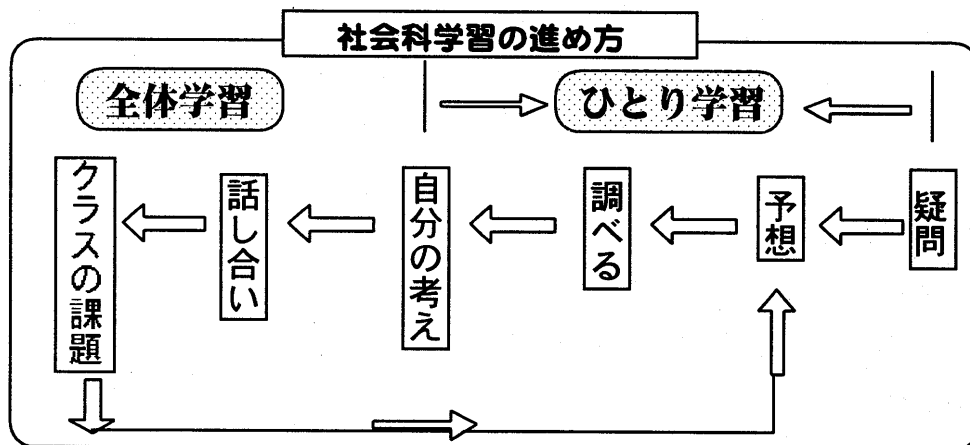
## 対象との出会わせ方

初めて対象に出会うとき、子どもたちがその対象に対してどのようなおもいを持っているのかということをお大切にしたいと思う。「その対象に対して、ぼくは〇〇だと思う。」「わたしは、〇〇について疑問を持っているよ。」というふうに行くとおりの思いを持たせたい。子どもが、対象に対して予想や疑問など、自分なりの思いもなしに対象と出会うということのないように、私たちは指導しなければならない。そうすることで、子どもひとりひとりの持つ思いが、ひとり学習のスタートとなるのである。

## 対象との関わり方

対象と出会ったとき、子どもは、様々な疑問を持ち追求を始め自分で課題を見つけるのである。その子にとってのひとり学習が充実していれば、本来、教師の働きがなくても進めていけるものである。追求が深まれば子どもたちはもっともっと知りたくなりひとり学習の深まりと自分の自信につながるのである。そして学級での全体学習で話し合いを続けるうちに“互いの刺激”が生まれてくる。例えば「なるほど、そんな考えもあるんだな」と友達の考えに共感することや「ぼくと〇〇さんは考えがちがうようだから、～を用意してもう一度、ぼくの意見を言い直してみよう。」というように友達を意識してのひとり学習の追求が始まるのである。

しかし、自分の疑問を解決する方法が分からない子もいる。そんなとき教師が、どう“その子”に関わり“調べ方や方法”をアドバイスするのが非常に大事になる。“今、〇〇を調べているのはあなただけだから、自信を持って発表したらいいよ”というアドバイスも効果的である。当たり前なことであるが、今誰がどんなことを調べ、どういうふう資料作りをしているのかを教師が把握しておくのは当然のことである。このことは子どもと教師のまなざしの共有につながるのである。



## ☆ “疑問を持つ目” “物を見る目” を育てる

ある子が、※「弘法大師は高野山にお寺をつくりました。そして小さいころの名前は真魚といったそうです。」と発表した。「これについて何か質問や意見がありますか？」と聞いたところ、一人の子が手を挙げて「私は、弘法大師はすごいなあと思いました。」と答えた。これで終わり。

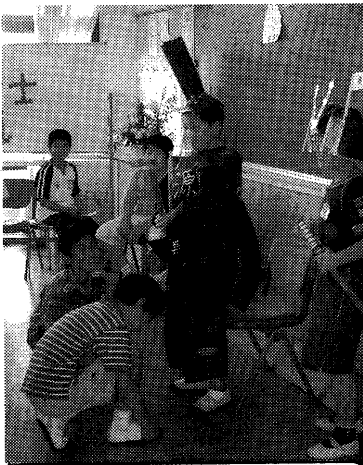
次の発表に移ろうとしたのである。そこでストップをかけた。“今から※について 20 個疑問を書いてみて”と子どもたちに指示した。「エーそんなにないわ」「なんてないことでもええんか」という子どもたちであったが、5分ぐらいで書き終わった。子どもたちからでた疑問は・・・

- ・弘法大師はなぜ高野山に目をつけたのか？
- ・弘法大師はどんなものを食べていたのだろうか？
- ・香川県で生まれたのに、一人で船に乗って香川県を出発したのかな？
- ・豪族の家に生まれたのになぜお坊さんになったのだろうか？
- ・高野山と高野豆腐ってなんか関係あるのかな？

等々、子どもたちがいう「なんてことのない疑問」がたくさん出てきた。私たちはこの「なんてことのない疑問」をできるだけたくさん持ち学習対象を見つめる目を持った子どもを育てていきたい。「すごい」「おもしろい」「楽しい」でなく“何が”すごいのか，“どこが”おもしろいのか“なぜ”楽しいのかというように、もっと自分のこだわりやおもいをもって学習対象を見つめ捉えていける子どもを育てることが意味と内容のひろがりにつながると考えるからである。

#### 4 社会科学習でのまなざしの共有

具体的に「いざ鎌倉！」(6年 源頼朝と武士の世の中)の実践から、社会科学習でのまなざしの共有を考えていくことにする。



頼朝の劇をする子どもたち

この単元で考える「意味と内容」とは“源頼朝を中心に武士の世の中が始まり、鎌倉幕府をよりよい国にしようと幕府がおこなった政策やしぐみ”をとらえた。

鎌倉時代というのは、時代の大きな分岐点である。今までの貴族中心の政治から、武士の政治へと変化する時代である。そこで大事にしたいこととして・・・

- 1 平安時代の貴族や朝廷に対しての不満から地方に小さな武士団ができ、やがてそれが“平氏”と“源氏”といった大きな武士団となっていったこと(武士のおこり)
- 2 源平の戦いを中心とした源頼朝の活躍によって、鎌倉幕府が開かれたこと(武士による政治の始まり)

#### 3 “ご恩”と“奉公”の関係(武士と幕府の関係)

この三つを単元の柱として、学習を進めていった。

この単元で“ひとり学習”を充実させるための課題設定をどうするか。鎌倉時代の歴史新聞作りをきっかけに、たくさんの疑問を持つ中で上記の三つが全部学習できるような学習課題を子どもたちに見つけさせひとり学習を進めていくことがまなざしの共有につながるものと考えた。

## 課題設定について

子どもたち	指導者のおもい
<p>自分たちで考えた課題</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・命をかけてまでほうびがほしかったか？</li> <li>・武士は全員頼朝の言うことを聞いたのか？</li> <li>・本当に“いざ鎌倉”と武士が集まったか？</li> <li>・頼朝のために命をかけられたのか？</li> </ul> <p>など他にも課題を考えていたが、いろんな課題をひっくるめて下記のように本時の課題を設定した。</p>	<p>多様な考えがでる課題・・・</p> <p>「武士の成り立ち」「武士の生活」 「幕府のしくみ」「ご恩と奉公」 など、この単元での“意味と内容” を深める事ができると思った。</p>

### 本時の課題

**武士が頼朝のために“いざ鎌倉”と命をかけて戦ったのはなぜか**

この課題に対して子どもたちは、ひとりひとりが自分の考えを持ち、その考えをより確かなものにするために、ひとり学習をおこなった。子どもたちは課題に対して様々な考えを持っていた。

例えば・・・

- |                              |                 |
|------------------------------|-----------------|
| ・土地などのほうびがほしかった。             | ・家族を養うためにがんばった。 |
| ・頼朝の命令は絶対だから。                | ・ぼくは命なんかかけられない。 |
| ・武士というものにほこりをもってたんじゃないか。・・・・ |                 |

などの考えを持ち、ひとり学習を進めるうちに考えの根拠を見つけていった。ひとり学習の中で「頼朝は一体どんな人だったのかな?」「武士はどんな生活をしていたのだろう」「幕府と朝廷の関係は?」など自分の考えが深まっていった。子どもたちは、誰が今、どんな調べをしているのかはお互いにはっきりとわかっていない。しかし、課題を話し合う前に座席表で、誰がどんな考えを持ち、どんな資料をもっているのかがわかるので、「自分は〇〇さんと同じ考えだけどひとり学習の根拠の持ち方が違う」ことに気付いていくのである。これがまなざしの共有のもとになるのである。クラスの課題を解決していく中で、ひとり学習の方法が違って、考えが違ってひとりひとり課題に対してのおもいがある。ひとつの課題に対して、37人のまなざしがつながっているのである。このまなざしの共有があるからこそ、学習が成り立っていく。「自分の考えをみんなに話す、そして友達の考えを受容すること」をまなざしの共有と捉え今後も大事に学習を進めていこうと思う。そして社会の学習を通して対象を見つめ、考えを深めていく中で、自分の生き方を探っていけるそんな子を育てていきたい。